

《翻 訳》

「民主主義 古代と現代」(2)

M. I. フィンレイ
柴田平三郎 訳

- 第1章 指導者と追随者 (前号)
 - 第2章 アテナイのデマゴグたち (本号)
 - 第3章 民主主義, 同意および国益
 - 第4章 ソクラテスと彼以後
 - 第5章 古典古代における査定官職
- 第2章 アテナイのデマゴグたち

紀元前413年におけるシケリアでの敗北のニュースがアテナイ人たちの許に届いたとき、彼らはそれを信じようとしなかった。やがてこの破局の大きさに気付くと、人々はツキディデスが書いているように、「自分らが決議の投票をなした主体であることを忘れたかのように、この遠征挙行を声をそろえて積極的に支持した政治家たちに対して非難をあらわにした。」(『戦史』8.1.1)。これに対してジョージ・グロートは以下のような意見を述べている。「この言葉から判断すると、ツキディデスは、この遠征に賛成投票したからには、アテナイ人たちはそれを積極的に推し進めた政治家たちに対する意義申し立ての権利を自ら放棄したことになると考えているように思われる。私としては彼の見解に到底組みすることはできない。どんなものであれ、重要な措置を進言する者は、つねにその正義、有効性および実行性に道徳的責任を負っており、その結果が自分の予測したものと正反対になったとしたら、その事態に応じて、不名誉を蒙ってしかるべきなのである。」¹⁾

これら二つの対立する引用句はアテナイの民主政治に内在する基本的な問題をすべて提起している。政策決定とリーダーシップ、決定とそれに対する責任、といった諸問題である。残念ながら、ツキディデスは、シケリアへの大侵攻を民会に決定させた政治家たちについてはほとんど何も語っていない(6.1-25)。実際、彼は、シケリアの都市エゲスタから来た使者たちや、シケリアから戻ったばかりの自国の使者たちからアテナイの人々が間違った情報を与えられていたこと、そして、侵攻に賛成投票した人々の大部分がシケリア島についてあまりにも無知であって、その島の大きさや人口についてさえ知らないほどであったということ以外には、その集会について具体的には何も語っていない。

五日後、第二回の民会が必要な軍備を認可するために開かれた。将軍ニキアスはこの計画全体をひっくり返そうとした。彼は、歴史家によって名も記されず、全く叙述もされていない、アテナイ人もシケリア人も含めた一群の発言者に反対された。さらにアルキビアデスにも反対されたが、彼についてはその演説がとり上げられていて、それを読むとツキディデス自身と彼のアルキビアデスに対する見方がよくわかる。とはいえ、その時議論されていた緊急の問題についても、あるいは民主的な手続きやリーダーシップといったより広い問題についてもほとんどわからない。結果はニキアスの完全な敗北に終わった。ツキディデスが認めているように、皆はその計画を実行することに以前にもまして熱心になっていた——老いも若きも、重装歩兵(市民のうちの富裕な層からなる)も一般庶民も同様に。計画に反対であったごく僅かの人々は、非愛国的に思われることを恐れて、投票しなかった、とツキディデスは書いている。

シケリア遠征が賢明なものであったかどうかは、判断の難しい問題である。ツキディデス自身でさえ、生涯のうちに一度ならず見解を変えている。しかしながら、彼は発言者たちについては見方を変えていないようである。つまり彼らは遠征を間違った理由から推進し、民会の無知につけこみ、感情を煽り立てることによって勝利を得た、というのである。彼によると、なかでも最も強硬

1) *A History of Greece*, new ed. (London 1862) V 317 n3.

だったのはアルキビアデスであったが、それというのも彼はニキアスを打倒しようとしていたからであり、また彼自身野心家であって、遠征を指揮することによって名声を博し、富を得ようとしたからである。彼の贅沢好みと放埒さは彼の財産ではまかないきれないほどのものだったからである。ツキディデスは他の箇所でもっと一般的な書き方で次のように記している。ペリクレスの下では「その名は民主主義と呼ばれたにせよ、実質は秀逸無二の一市民による支配がおこなわれていた。これに比べて、かれの後の者たちは、能力において互いに殆んど優劣の差がなかったので、皆己れこそ第一人者たらんとして民衆に媚び、政策の指導権を民衆の恣意にゆだねることとなった。このことが禍して、アテナイのごとく大きいポリスを営み、支配圏を持つ国ではとうぜん、数多い政治的過失が繰返されることとなった。」(2. 65. 9—11)。

手短かに言えば、ペリクレスの死後、アテナイはデマゴグたちの手に落ち、崩壊してしまった。ツキディデスはこれまで引用してきたどの句の中でも「デマゴグ」という言葉を用いてはいない。この言葉はツキディデスはほとんど使っていない²⁾し、そのことはギリシアの文献一般にもあてはまる。アテナイの様子を示すのに、デマゴグとかその取り巻きやおべっか使いといったテーマ（これらは言葉としては稀にしか使われないが）ほど馴じみの深いものはないことを考えると、この事実は意外かも知れない。デマゴグとは悪い意味である。つまり、「人々を導く」ということは人々を誤った方向に導くことであり、とりわけ、導き損なうことによって誤った方向に導くことである。デマゴグは私欲に駆られ、権力欲に駆られ、そして権力を通じて富を獲得しようとする。これを達成するためにデマゴグはあらゆる原理、あらゆる真のリーダーシップを放棄する。そしてあらゆる方法で人々におもねる。ツキディデスの言葉によれば、「民衆に媚び、政策の指導権を民衆の恣意にゆだねることになった。」この様子は直接的にだけでなく、その反対側からも描かれている。例えばツキディデスの描く正しい指導者像は次のようなものである(2. 65. 8)。「[この違いの原因は]ペリクレスは世人の高い評価をうけ、すぐれた識見を

2) 「デマゴグ」という言葉が使われているのは 4.21.3 においてのみであり、「デマゴギー」も 8.65.2 で使われているだけである。

備えた実力者であり、金銭的な潔白さは世の疑いをいれる余地がなかったので、何の恐れもなく一般民衆を統御し、民衆の意向に従うよりも己れの指針をもって民衆を導くことをつねとした。これはペリクレスが口先一つで権力を得ようとして人に媚びなかったためであり、世人がゆだねた権力の座にあっては、聴衆の意にさからっても己れの善しとするところを主張したためである。」

みんながこのような判断をしていたのではなかった。アリストテレスはアテナイの崩壊をもっと前の時期のこととして叙述している。すなわち、デマゴギーが跋扈することとなったのは、エフィアルテスがアレイオス・パゴス会議の権限を剝奪した後としている。さらにアリストテレスによれば、ペリクレスはまずキモンを背任行為のかどで告発することによって政治的影響力を獲得した。そして精力的に海軍力強化の政策を追求し、「その結果大衆は自信を得て全政権をますます自分の手に収めるに至った」。ペリクレスははじめて陪審員に報酬を出すことにしたが、それによって大衆自身の金で大衆の心をつかむことになった。こうしたことはデマゴギー的行為であって、それによってペリクレスは権力を手中にしたが、彼はそれをアリストテレスも認めているように、大変適切に行使した³⁾。

しかし私の関心は個人としてのペリクレスをどう評価するかでも、また、デマゴギーの辞書学を行うことでもない。ギリシアの政治的語彙は、個々の役職や機関の公式名を除けば、普通曖昧で大まかだった（もっとも、それすらも曖昧なことが多かったが）。作家はみな、政治的リーダーシップの必要性を不問の前提として受け入れていた。彼らが問題としていたのは良いタイプと悪いタイプとを区別することだった。容易に理解できることだが、アテナイとその民主政治に関して言えば、「デマゴグ」という言葉は悪いタイプを指し示す最も簡単な言い方となった。その言葉が実際にある文献に使われているか否か

3) *Constitution of Athens* 27—28 [村川堅太郎訳「アテナイ人の国制」『アリストテレス全集17』岩波書店、1972年]；*Politics* 1274 a 3—10 [山本光雄訳『政治学』岩波文庫]も参照。A. W. Gomme, *A Historical Commentary on Thucydides* (Oxford 1956) II 193, は次のように指摘している。「プルタルコスにはペリクレスの政治経歴をはっきりと二分している。権力を掌握するために悪らつなデマゴギー的な技術を使った前半期と、権力を掌握し、それを高潔に使った後半期とに。」

は全く問題ではない。おそらく、デマゴグ像を確立したのは、クレオンをデマゴグとして描いたアリストファネスだった。もっとも彼はデマゴグという言葉は直接にはクレオンにも他の誰にも用いてはいない⁴⁾。同様にツキディデスも間違いなく、クレオフォンやヒュペルボロス、およびシケリア敗北に責任のある発言者たちのうち、すべてではないまでも、何人かを、デマゴグとみなしていた。だが、彼もこれらの誰に対してもその言葉を使ってはいない。

この「タイプ」という言葉に強調点を置くのは重要である。というのも、ギリシアの作家たちによって提起された問題点は、指導者の本質的な資質を問うことであって、彼の政治的技術や技術的能力ではなく（そうであったとしても、それは非常に副次的な場合だけである）、その政策やプログラムですらない（非常に一般化された意味での政策やプログラムを除いては）。決定的に重要なのは、国家の善をのみ念頭においてリーダーシップをとる指導者と、私欲に駆られて自分自身の地位を至上のものと考え、そのために大衆におもねる指導者とを区別することである。前者といえども、間違いを犯し、誤った政策をとることがあるかもしれない。これに対し後者が、健全な提案を行うこともある。たとえば、アテナイの権力を掌握した寡頭制を打倒するために、紀元前411年にアテナイにとって帰ろうとしたサモスの船隊の出航を、それが海軍の立場を危くさせることを根拠に、アルキビアデスがやめさせた場合がそうである。ツキディデスは彼の行動を明白に承認している（8.86）。しかしこうしたことは基本的な問題ではない。個々のデマゴグの個人的特徴も大した問題ではない。たとえばクレオンの、議会で演説する際に大声を張り上げる習性だとか、金銭に汚かったこととか、などなど。こういったことは単にデマゴグ像を少しはつきりさせるに過ぎない。アリストファネスからアリストテレスに至るまで、デマゴグに対する攻撃は常に、ただ一つの中心的問題にかかわっている。すなわち、いったい指導者は誰の利益のために存在するのか、ということである。

4) アリストファネスは「デマゴギー」と「デマゴギー的」という言葉を *Knights* [松平千秋訳『騎士』『ギリシア喜劇全集Ⅰ』人文書院 1961年] の191行と217行でそれぞれ一度ずつ使用している。彼の遺された戯曲の中では他にはやはりたった一度だけ、「デマゴグになる」という動詞形が使われているだけである（*Frogs* [高津春繁訳『蛙』『ギリシア喜劇全集Ⅱ』人文書院 1961年] の419行）。

こうした問題の立て方の背後には、三つの命題が存在する。まず、人間は道徳的な価値や能力においても、社会的経済的地位においても、不平等である、ということ。第二に、どんな社会も党派に分かれる傾向があり、その最も基本的なものは富と血筋の良さを誇る者と、貧しい者との分裂であって、それぞれ独自の資質、潜在能力および利害を持っている、ということ。第三に、秩序がよく保たれ、うまく運営されている国家は党派を超越し、良き生活の道具として役立つ、ということである。

党派は最大の悪であり、最も陥りやすい危険である。「党派」(faction)はギリシア語の「スタシス」(stasis)の慣習的な英訳であるが、これほど注目に値する言葉は他の言語にもめったに見当たらない。その元来の意味は、「配置」(placing)、「設置」(setting)、「到達段階」(stature)、「地位」(station)といったものである。その政治的意味の範囲は、辞書に出ている定義を並べるだけで、よくわかる。すなわち、「党」(party)、「煽動的目的で結成された党」(party formed for seditious purposes)、「党派」(faction)、「煽動」(sedition)、「不和」(discord)、「分裂」(division)、「異議」(dissent)、そして最後に、辞書に載っていないのは奇妙なことだが、「内乱」(civil war)、「革命」(revolution)といった意味が確実にある。「デマゴグ」とは違って、「スタシス」は文献に大変よく出てくる言葉で、通常は悪い意味で使われる。奇異なことに、それは近代のギリシア史研究の中では相対的に無視されてきた概念である⁵⁾。元来は「地位」(station)とか「立場」(position)といった意味を持ち、政治的な文脈で用いられる場合でも、抽象的には、同様に中立的な意味を持ち得る言葉が、実際にはそうとはならず、直ちに最悪の意味を持ってしまう、という事実には深い意味があるに違いない。しかしそのことは十分に究められてはいないように思われる。政治的立場、すなわち党派的立場——そういう意味になるのは避けがたいが——は悪いことで、煽動、内乱、そして社会の崩壊に導く。

5) A. W. Lintott, *Violence, Civil Strife and Revolution in the Classical City* (London 1982), は不十分である。依然として D. Loenen の就任公開講義, *Stasis* (Amsterdam 1953) を参考にすべきである。彼は現代の作家たちの間での最も一般的な見解とは異なって、「非合法性は stasis という概念に常にみられたわけでは決していない」(p. 5)。

そしてこの同じ傾向はギリシア語を通じて繰り返し見られる。結局、「大衆の指導者」という意味の言葉である「デマゴグ」が一体何故に、「大衆の誤った指導者」という意味にならざるを得ないのか、ということについては、永遠の法則はない。同様に、古いギリシア語の言葉で、「クラブ」とか「社会」といった意味もある「ヘタイリア」(hetairia) が何故に、紀元前5世紀のアテナイでは同時に「陰謀」とか「煽動的組織」を意味するようになったか、もそうである。どんな説明にせよ、それは言語学ではなく、ギリシア社会それ自体の中にある。

ギリシアの政治著作家の物を読めば誰でも、この点に関するアプローチの一致に気付かない訳にはいかない。彼らの間の不一致がどのようなものであれ、彼らは一様に、国家は階級や他の党派の利害の外に立たねばならない、と主張している。国家の目標と目的は、道徳的なものであり、時間を超えたものであり、普遍的なものである。それが達成できるのは——もっと正確に言えば、接近できるのは——ただ教育、道徳的行為(特に、権威を持った人々の側の)、道徳的に正しい立法、および正しい支配者の選択によってのみである。経験的事実として階級や利害関係が存在するという事は、もちろん否定されてはいない。否定されているのは、政治的目標の選択が階級や利害関係者と結び付いてよい、とする考え方であり、あるいは、国家の善は私利の無視(抑圧とは言わないまでも)なしに推し進めることができる、とする考え方である。

このような考え方を最も根底的なかたちで追求したのはプラトンであった。『ゴルギアス』(502E—519D)の中で彼は過去の偉大なアテナイの政治家たち——ミルティアデス、テミストクレス、キモン、ペリクレス——でさえも、真の政治家ではなかった、と主張している。彼らは船や城壁や造船所を作ることでもって「大衆」(demos)の要望を満足させることに、彼らの後の政治家たちよりも熟達していたに過ぎない。彼らは市民たちをより良い人間にすることはできなかったのも、彼らを「政治家」(statesman)と呼ぶのは、パン職人と医者とを混同するようなものだ。そこで『国家』において、プラトンは全権力を少数の人からなる、選ばれた、適切な教育を受けた階級に掌握させることを提案した。この人たちは最もラディカルな措置によって、あらゆる特別な利

害から自由でなければならなかった。つまり、私有財産も家族も彼らには否定されたのである。このような条件の下でのみ、彼らは完全な、道徳的な政治家としてふるまうことができ、どんな私欲も入り込む可能性なしに国家をその正しい目標に導くことができるのである。

プラトンは明らかに非典型的な人物の最たるものであった。プラトンをもって全ギリシア人を一般化することはできないし、他のどのギリシア人とも比較することはできない。専門家、つまり哲学者たちが、国家の唯一の目的である善き生活、徳のある生活、について普遍的に正しく、権威ある決定を下すことができる（従って彼らにそれを実行する権限が与えられるべきである）、とするプラトンの情熱的な確信を、一体誰がもっていただろうか⁶⁾。しかし、ここでいまとり上げている問題——つまり私利と国家——に関して、プラトンは多くのギリシアの著作家たちと共通の基盤の上に立っていた（尤も、その解決策に関しては、彼らはプラトンと意見を異にしてはいたが）。アイスキュロスの『エウメニデス』の大詰めの場面で、合唱隊は次のように高らかに歌っている。すなわち、国家の福祉は調和と党派からの自由のみあり得る、と。ツキディデスも一度ならずこのことを述べている⁷⁾。そしてそれは、すぐ後にアリストテレスの『政治学』において見られることになるような、混合政体の理論の基礎となっている。

ギリシアの哲学者たちの中でものごとを最も経験的にとらえたアリストテレスは、「スタシス」に関する事実をも含め、ギリシア国家の実際の作用について膨大なデータを収集した。『政治学』は「スタシス」の精緻な分類学を、またいろいろな状況の下でいかにして「スタシス」を避けることができるかについての助言すらをも、扱っている。しかし、アリストテレスの規範と目標は倫理的なものであり、彼の政治学は道徳哲学の範疇に入る。彼は政治行動を目的論的に、すなわち、人間の本性からいって人間が当然もっている道徳的目的に

6) R. Bambrough, "Plato's Political Analogies," in *Philosophy, Politics and Society*, ed. Peter Laslett (Oxford 1956), pp. 98—115 を見よ。

7) この考えは、紀元前427年におけるケルキュエラの「内乱」(stasis) についての彼の長い説明（『戦史』3. 69—85）において十分に展開されている。

従って、とらえた。したがって彼は、統治者が私的、あるいは階級的利害から決定を下す場合、これらの目的は損なわれると考えた。この基準に従って、アリストテレスは三つの「正しい」統治形態（「絶対的正義に則した」）とその墮落形態との区別を行った。君主制は、君主が国家全体の利益よりはむしろ私的利益に従って統治する場合、専制になる。同様に、貴族制は寡頭制になり、国制は民主制になる（あるいは、ポリビウスの言葉を借りれば、民主政治は暴民政治になる）。⁸⁾ さらに、民主制の中では、農村部でのものの方がより優れている。というのも、農民は忙し過ぎて民会にわざわざ出かけないのに対し、都市の職人や商店主はたやすく民会に出ることができるが、こういう人々は「たいがい卑しい大衆である。」⁹⁾ からだ。

政治分析と道徳的判断との間の大きな違いは、第一章で私が引用した「年若い寡頭制論者」の言葉に如実に表わされている。「アテナイの統治制度についていえば、私はそれを好まない。しかし、アテナイが民主制を取ることを決めて以来、彼らは民主制をうまく保持しているように私には思われる。」¹⁰⁾ 要するに、とりちがえてはいけない、と著者は次のようにいう。「私もそうだが、あなたがたの中にも民主制を好まない人もいるだろう。しかし事実を冷静に判断してみれば、我々が道徳的な根拠から非難するものが、実際の力としては非常に強力で、その原因はまさにその非道徳性にあるのだ。」このような考え方は非常に有効に思われるが、しかし古代ではそれは追求されなかった。そのかわり、反民主制の立場をとった思想家たちは、政治はいかにあるべきかということに固執した。そして民主制の側に立った人々はどうだったのだろうか。A. H. M. ジョーンズは、遺された文献の中の断片的な証拠から民主主義理論を復元しようとした。その大半は紀元前4世紀の文献である¹¹⁾。さらにエリック・ハヴロックは、主にソクラテス以前の哲学者たちが遺した言葉から、紀元前5世紀のアテナイの政治の中にある「自由な気風」と彼が呼んだものを発見しようと大

8) 『政治学』1278 b—79 b ; 1293 b—94b ; *Polybius* 6. 3—9 参照。

9) 『政治学』1319 a 19—32 ; Xenophon, *Hellenica* 5. 2. 5—7 参照。

10) Pseudo—Xenophon, *Constitution of Athens* 3. 1 ; Fuks, “The ‘Old Oligarch,’” *Scripta Hierosolymitana*, 1 (1954) 21—35 を見よ。

11) *Athenian Democracy* (Oxford 1957), ch. 3.

きな努力を払った。ハヴロックの著作の書評の中で、モミリアーノはそのような努力は、「紀元前5世紀に民主主義の明確な観念があったかどうかは疑わしい」ので、はじめから徒労に終わる運命にある、と示唆した¹²⁾。

私はすでに前章で、明確な民主主義理論がアテナイにあったとは思わない、ということを示しておいた。ジョーンズが集めたような観念、原理、一般概念はあることはあったが、それらは体系的な理論にはなりえていない。それに、体系的な理論がある必要などあるのだろうか。歴史上の社会制度や統治制度にはみな、必ず精緻な理論体系があったはずだとするのは、奇妙な間違いである。そのような理論体系が出現するのは、しばしば法律家の働きによるものであるが、アテナイには正確な意味での法律家は存在しなかった。あるいは哲学者もそのような働きをしたかもしれないが、この時期の体系的な哲学者たちがもっていた観念や価値観は、民主主義とは相入れないものであった。アテナイ人たちが自分たちでできなかつた分析を、私たちは私たち自身で試みてみなければならない。

アテナイの民主政治を説明する際に、以下の、各々自明な四点を軽視するならば、それは全く妥当性を欠くことになる。第一点は、それが直接民主主義であった、ということである。そしてそのような制度がいかに代議制民主主義と共通性を持とうとも、両者はある基本的な点において異なっている。とりわけ、わたしがここで問題にしている点においてまさにそうである。第二点は、エーレンブルグがギリシアの都市国家の「空間的狭さ」と呼んだものであるが、彼が正しく強調したように、それを押さえておくことは当時の政治生活を理解する上で決定的に重要なことである¹³⁾。その意味はアリストテレスの次の有名な一節に要約されている。「余りに多人数から出来ていたのでは……国制もつのが容易でないから、国ではないであろう。何故なら誰が余りにも過度に多人数のものの将軍となるであろうか。あるいは、ステントルのような声をもつ

12) E. A. Havelock, *The Liberal Temper in Greek Politics* (London 1957) とそれに関する A. モミリアーノの書評を見よ。 *Rivista storica italiana*, 72 (1960) 534—41。

13) *Aspects of the Ancient World* (Oxford 1946), pp. 40—45。

のでなければ、誰が彼らの伝令となるであろうか。」(『政治学』1326b3—7)。

第三点は、民会が事実上、この制度の頂点に位置するもので、先例においても範囲においてもほとんど制限を受けず、すべての政策決定を行う権限と権力を持っていたということである。(厳密に言えば、民会が多数の庶民から成る民衆法廷に対して判断を仰ぐ場合もあることはあった。しかし私としてはその場合の民衆法廷の機能の、すべてではないにしても、大部分を無視してもよいと思う。というのも、アテナイ人たちが考えていたように、私もまたそう思うのだが、民衆法廷が政治の実際のメカニズムを複雑にしていたにしても、それは民衆の絶対的権力が直接機能していることの表れであって、その還元ではないからである。そしてまた、私が行おうとしている作用的分析が大きく変わるわけではないし、仮にここで民会に注目しなかったならば、その分析が恐らく曖昧になってしまうからだ。)最後に、民会はプニックスと呼ばれる丘で開かれる青空集会であって、従って、第四点は、群衆行動が問題となる、ということである。すなわち、民会での行動の心理と法則は、小集団でのそれとは同じではあり得ず、また、現代の議会のようなより大きな集団のそれですら、あり得ない。(もっとも、今日われわれは、これらの影響の存在を認める以上のことはほとんどできない、と言わざるを得ない。)

いったい、民会を構成していたのはどのような人々だったのだろうか。その質問には満足に答えることはできない。すべての成人男子は18歳になれば自動的に民会に出席する資格を得た。そしてその特権を死ぬまで保った(何らかの理由によって市民権を失った少数の者を除いて)。ペリクレスの時代に、その数は3万5千ないし4万くらいであった。婦人は除かれた。同様に、自由民ではあるが市民権を持たず、政治の領域外にいたかなり多くの人々、そのほとんどはギリシア人であったが、彼らもまた除かれた。そしてまたそれよりもっと多くの奴隷たちもそうであった。数字はすべて推定であるが、成人男子市民が全人口(都市部と農村部を合わせた)の約6分の1を占めていたと考えても大きく間違っていないだろう。しかし重要な点は、4万人のうちどのくらいが実際に民会に出席したかということである。通常の条件下では出席者は主に都市部の住民であったと想像するのが妥当であろう。農民のうちでも民会にわざ

わざと出席しようとした者はより少なかったであろう¹⁴⁾。従って直接参加という点では、有資格者のうちの一つの大きな部分が排除されていたことになる。このことは知っておくべきことであるが、だからといってそれだけで終わりではない。たとえば遺された資料が語るいくつかの手掛かりから、民会の構成が通常は高年齢層やより富裕な層に傾いていたと推量することができる。しかしそれとても推量に過ぎず、傾きの程度は推量すらできない。

それでも、一つの重要な事実はわかっている。つまり、民会の開催の都度、その構成が変わっていた、ということである。民会の構成員などというものはなかった。ただ特定の日の特定の民会の構成員がいただけである。重要な問題が論議されることのない、静かで平和な時代には、おそらく民会毎にその構成員が大きく変わることはなかったであろう。しかしそれでも、民会を実際に開いてみなければ、どうなるか予測はできなかった。政策立案者は、民会に臨んだ時、前回になされた決定を覆すような構成の変化が、偶然にせよ、特定層のある程度組織的な動員にせよ、起きていないかどうか、はっきりつかむことはできなかった。それに時代は平和でも正常でもないことがしばしばであった。たとえば極端な例を引くと、ペロポネソス戦争の最後の10年間に、農村部の全人口は田園を放棄して都市の城壁内に住むことを余儀なくされた。この期間、民会における農村出身者の比率が普段よりも大きくなかったと考えるのは当を得ていない。同様な状況が他の時代にも、より短い期間ではあるが、見られた。例えばアッティカで敵軍が展開していたときがそうである。だからアリストファネスが『アカルナイの人々』の冒頭で、農民に語らせた独白を文字通りに解釈する必要はない。その農民は、プニュックスの丘で民会が開催されるのを待ちながら、いかに自分が都市とそこに住む人々みんなを憎み、誰であれ平和以外について提案する発言者をやじり倒すつもりかを、独白しているのである。しかしクレオンには、丘に座る、自分の目の前のこのような予測のつかな

14) アテナイの民会の出席状況については、*Greek, Roman and Byzantine Studies* 中の M. H. Hansen による二つの論文——17 (1976) 115—34, 23 (1982) 241—49——を見よ。これらは彼の著書、*The Athenian Ecclesia* (Copenhagen 1983), ch. 1—2 に再録されている。

い存在を無視する贅沢は許されなかった。民会の大多数が都市住民から成っているときには通せたかもしれない政策路線を、彼らにはひっくり返すこともできなかったからである。

一つの明らかな例が紀元前 411 年に起こった。その時、民会は民主制の廃止を票決するように仕向けられた。そしてこのことが、サモス島に船隊が大動員され、停泊していた時に起こったのは、決して偶然ではない。海軍に服務していたのは、貧民層から成る市民たちで、彼らは、紀元前 5 世紀後半当時の民主制の強固な支持者としてよく知られていた。彼らはサモスにいたため、アテナイにいたことができず、そのため、寡頭制派が民会で多数を占め、勝利を収めた。その寡頭制派は、元来は有資格者のうちの少数派であり、しかも代表的な少数派とは言えない部類の人々だった。アテナイの政策の歴史を研究する上で資料からはっきりはわからないが、アテナイの指導者たちが民会の構成の変わり得ることを充分心得ていて、それを計算に入れていたことは確かであろう。

さらに、民会はその都度、完結していた。入念な準備が評議会 (boule) によってなされたり、非公式の投票依頼がなされたり、不真面目で無責任な動議をチェックするための工夫もあったりはしたが、それでも、通常の手続きでは、一回の会期内で、議案が提出され、論議され、そして通過されるか否決されるかした (修正の如何を問わず)。従って、場所の狭さの上に、時間の制限があり、しかもプレッシャーが特に指導者 (および将来の指導者) たちに課せられたことも考慮に入れなければならない。私はすでにシケリア遠征の場合について言及しておいたが、それは事実上、一日で決定されたのであり、計画の内容自体はその 5 日後に、遠征の規模と費用とが議論され、票決された時に、決められたのである。

もう一つの例は、かの有名なミュティレーネー論争である。ペロポネソス戦争の初期、ミュティレーネー市はアテナイ帝国に反乱を起こした。反乱は鎮圧され、アテナイの民会は、見せしめのため、ミュティレーネー市民の全男子人口を死刑に処することを決定した。しかし直ちに感情の変化が起こり、この問題はすぐ翌日の民会で再討議されることになった。そしてその決定は覆された (ツキディデス『戦史』3.27—50)。当時、アテナイで最も重要な政治家であ

ったクレオンは、恐怖の政策を主張した。二回目の民会では、彼は敗北した——彼は、両日、議論に参加していた。もっとも、その結果、彼はその地位を一時的にさえも失ったようには見えない（そうなっても当然なのだが）。しかしそのように24時間で覆ってしまうようなことが、彼に及ぼした心理的な影響をどのように計ったらよいのだろうか。その時の衝撃だけでなく、そのような可能性がアテナイの政治に常にあるということを、彼が指導者としてその生涯を通じて認識していたことを、どのように推し量ったらよいのだろうか。そのような質問に具体的に答えることはできないが、その重みは決して軽いものではなかったであろう。たとえば、ペロポネソス戦争の二年目に、ペストによって士気が一時的に打ち砕かれたとき、人々がペリクレスを急に非難し始め、彼に重い罰金刑を科し、將軍職を短期間、解任したことがあったが、その事実がクレオンのような人々にとって一体どのような意味をもっていたか、私たちにはわからないにしても、クレオンには確実にわかっていたであろう（ツキディデス『戦史』2.65.1—4）。ペリクレスでさえ、このような目に会うのだとしたら、一体だれがそれを免れることができようか。

ミュティレーネーの件の場合、ツキディデスによると、クレオンの主張は二日目にははじめから成功の見込みがなく、彼は、開会するやいなや民会がとろうとした行動を放棄させるべく、必死に説得を試みたが、失敗に終わった。しかし紀元前411年の民会の場合、ツキディデスが伝えているように、これとは異なっている（『戦史』8.53—54）。開会当初、寡頭制を導入すべきだとするペイサンドロスの提案に対して、一般の空気は反対であったが、その日の終わりには彼は勝利を手にしていった。実際の論議の結果、空気はおおいに変わり、彼は多数票を得ることになった。

何千にも上る野外の聴衆の票を獲得することをねらった討論は、つきつめていえば雄弁術にほかならない。従って政治指導者を「雄弁家」と呼ぶのは全く正しい。それは、我々が普通そう考えるような、単に政治家というものが持っている特殊な技術を示すものだけではなく、まさに政治指導者の同義語なのである¹⁵⁾。しかしアテナイの状況の下では、討論というものはそれ以上の意味を持っていた。私が描こうとしてきた民会の様子には、単に雄弁術ばかりでな

く、討論や決定の「自発性」も伺われる。それは少なくとも今日の議会制民主主義には欠けているものである¹⁵⁾。発言者も聴衆もみな、夜が訪れる前に、問題が決定されていなければならないこと、各出席者は「自由に」（鞭打ちの恐怖や集団による統制なしに）かつ目的的に投票すること、それ故、演説や議論は聴衆をその場で説得するものでなければならないこと、そしてそれらは全体としても個々においてもすべて真剣な行為であったこと、をよく知っていた。

「自由に」という言葉を括弧でくくったのは、この言葉によって、自由な、肉体と切り離された理性の働き、つまり啓蒙主義以降の政治理論によって大いにもてはやされたあの幻想を、私としては示唆したくはなかったからである。民会の構成員は議会の構成員を拘束する統制から自由であった。すなわち彼らは、役職を持たず、選出された訳でもないので、今回の選挙の際にそれまでの投票記録に照らして罰を受けたり、報いを受けたりすることはなかった。しかし、彼らは人間的条件からは自由ではなかった。すなわち慣習や伝統、家族や友人、階級や身分の影響から、さらには個人的な体験、怨恨、偏見、価値、願い、恐れ、といった、多くは無意識のうちにあるものから自由ではなかった。プニックスの丘に上っていた時、彼らはそうしたものを背負っていたのであり、そうしたものを背負いながら、彼らは論議に耳を傾け、決定を下した。それは現代の投票行動とは大変に異なった条件においてであった。たまに一人の人間ないし一つの党派に投票する場合と、数日毎に直接、問題そのものについて投票する場合との間には、大きな違いがある。アリストテレスの時代には、民会は36日間の期間内に少なくとも4回、開かれた。紀元前5世紀にもそうだったのかどうかはわからないが、ペロポネソス戦争の最中のように、民会がもっと頻繁に開かれたような場合もあった。

さらに、私がすでに述べたような二つの要素がある。一つは、アテナイ世界

15) 次のものを見よ。M. H. Hansen, "The Athenian 'Politicians,' 403—322 B. C.," *Greek, Roman and Byzantine Studies* 24 (1983) 33—55, と "Rhetores and Strategoi in Fourth-Century Athens," *ibid.*, 151—80.

16) O. Reverdin による価値のある論稿を参照せよ。"Remarques sur la vie politique d' Athenes au Ve siecle," *Museum Helveticum* 2 (1945) 201—12, および概括的には拙書, *Politics in the Ancient World* (Cambridge 1983), 特に ch. 4.

の狭さであって、そこでは民会の各種成員はプニユックスの丘に腰掛けている多くの人々を個人的に知っていたということであり、もう一つは、投票が大衆集会の中でなされたということである。それは他の投票者から物理的に隔絶された状態の中で投票用紙に印をつけるという非人格的な行為——さらにそれは、同じことを何百万という男女が、多くの場所で、それも何百マイルも離れたところでも、同時に行っているということを知りながら、行いう行為でもあるが——とは本質的に無関係な状況である。例えばアルキビアデスとニキアスが紀元前415年に民会に登場した時、前者はシケリア遠征を提案し、後者はそれに反対したのであるが、両者とも、もしその提案が通れば、どちらかが、あるいは両者ともが、遠征の指揮を求められることを知っていた。そしてこの時、聴衆の中の多くは、自分たちが士官として、兵士として、あるいは船隊の乗員として、数日のうちに出征するのか否か、について投票することを求められていたのである。そのような例は、重要性においてほとんど劣らない他の多くの事柄についても、いうことができる。例えば、課税、食糧供給、陪審員の報酬、選挙権の拡大、市民権についての取り決め、等々である。

確かに、民会の活動の多くはもっと地味なもので、その大半が技術的な措置（礼拝規制）や儀式（様々な人々に対する名誉の授与）から成っていた。アテナイでは人口を二分するような大問題が毎週毎週、議論され、決定されていたと想像するのは間違いであろう。しかし他方、何らかの大きな問題が起こらなかった年は殆どない（ましてや10年単位の期間をとってみればなおさらである）。すなわち、二度にわたるペルシアの侵攻、民主化過程や帝国を完成に至らしめた一連の措置、ペロポネソス戦争（27年間に及ぶ）とその間の二度の寡頭制、4世紀の果てしない外交的操作と戦争が続き、それらの招いた財政的危機は、フィリッポスとアレキサンドロスの時代に頂点に達した。ミュティレーネー論争の時のクレオンのように、政治家が翌日に議論の蒸し返しに会うようなことは、めったに起こらなかった。しかし民会は、長期の休日や休会もなく、始終開かれていた。例えば、週毎の戦争行為は民会に週毎に計られなければならなかった。それはちょうど、第二次世界大戦中のウィンストン・チャーチルが戦争行為の一つひとつを国民投票にかけて決めざるを得ないようなもの

である。しかもそれは、その行為を行った後、議會や法廷が、その次の措置をいかにすべきかばかりでなく、さらにはまた、彼を罷免すべきか否か、その計画を放棄すべきか否か、あるいは場合によっては、彼の刑事責任を問い、罰金刑や追放刑に処すべきか否か、提案自体ないしはその行為の実行方法のかどで死刑に処すべきか否かということさえ、票決するようなものであった。アテナイの統治制度の下では、政治家は、民会で絶えず挑戦にさらされるだけでなく、政治的な理由による訴訟の脅威にも同じように絶え間なくさらされたのである。

もしここで私が心理的な側面を強調するとしても、それは民会で投票した多くの人々の広範な政治的経験——評議會、法廷、区および民会自体での経験——を無視するのではなく、前に私が「肉体と切り離された理性主義という観念」と称したものに単に対抗させるためでもない。私が強調したいのはもっと積極的な何か、つまり、アテナイの民会に出席することに伴う関与の度合いの深さなのである。そしてこの深さは、発言者たちの間でも同様（あるいはそれ以上）であった。というのも、一票一票が、問われていた問題を決定すると同時に、彼ら自身をも裁いたからである。アテナイの政治指導者であることの条件を最もよく表す言葉を一つだけ選ばなければならないとしたら、それは「緊張」という言葉になるだろう。

このことは、票に左右されるすべての政治家にある程度あてはまる。「政治と統治のすさまじさ (desperateness)」とはマッカラム (R. B. McCallum) の当を得た言葉だが、彼はそれを次のように展開している。「確かに、派閥政治家の画策や姿勢をシニカルに見たり、うんざりだと感じることは、見識のある学者や役人にとっては自然のことであり、またある程度、当然のことでもある。彼らは政府部内の苦勞している上司たちの行動を、距離を置き、余裕をもって判断することができるのである。しかしこのことは、派閥政治家とその追隨者たちの目的と理想……の意図的な拒否と、国家の安全と福祉に対する永続的な責任とから生じているように思われる。派閥の指導者たちはある意味では使徒である。みながグラッドストーンではないにしても。自らを捧げるに値する政策もあれば、警告と恐怖を受ける政策もあるのだ。」¹⁷⁾

このことは、政党が存在しなかったにもかかわらず、アテナイの指導者たちについても当てはまると思う。アリストティデスにと同様にテミストクレスにも、キモンにと同様にペリクレスにも、そしてニキアスにと同様にクレオンにも。というのも、明らかなことだが、この種の判断は、特定の綱領や政策の長所ないし弱点についてのいかなる判断からも独立しているからである。もっと正確に言えば、このような言い方ではアテナイ人に関しては弱すぎると思う。アテナイの指導者には息抜きなど一切なかった。彼らはその影響力を直接獲得し、直ちに行使しなければならなかった——このことは代表制民主主義とははっきり異なったものとしての、直接民主主義の必然的結果であった——ので、自ら指導するとともに、自ら反対勢力の攻撃の矢面に立たねばならなかった。それどころか、彼らには頼るべきものは何もなかった。もちろん、彼らには補佐役がいることはいたし、政治家たちはお互いに同盟を結んだりもした。しかし、これらは基本的に個人的な結び付きに過ぎず、その結び付きもしばしば変わり、特定の措置を通すには役立ったけれども、官僚制や政党、あるいはローマの元老院のような制度化された機構によって提供されるような、支持の実質やクッション効果を欠いていた。重大な点は、アテナイには近代的な意味の「政府」はなかった、ということである。ポストや役職はあったが、民会の中では誰も何の身分も持っていなかった。指導者であるとしたら、それは民会そのものの中での、彼の個人としての、そして文字通り公的でない、地位のなせるわざであった。その地位を彼が持てるか否かは、ひとえに民会が彼の望むように票決するか否かにかかっていたし、それ故、そのことは提案ごとに繰り返し問われたのであった。

こうしたことがアテナイのすべての指導者の直面した条件であった。それは、ツキディデスとプラトンによって「デマゴグ」として一蹴された人々や、何人かの近代の歴史家たちによって「急進的民主主義者」と間違っ呼ばれている人々ばかりでなく、すべての指導者に当てはまる。すなわち、貴族であれ、庶民であれ、利他主義者であれ、利己主義者であれ、能力のある者であれ、無

17) *The Listener* (2 Feb. 1961), p. 233. の書評。

能な者であれ、アテナイ人たちの「先頭に立って意見を主張した」とジョージ・グロートの述べた人々すべてに、当てはまる。疑いもなく、先頭に立とうとした人々をつき動かした動機は様々であった。しかし、この文脈では、それは問題ではない。というのも、例外なく、その一人ひとりが、指導者になるということが、リスクも含めて、いかなることを伴うかをよく知りながら、そうなることを選び、そのために実際に行動に打ってで、競い合ったからである。限られた世界の中で、彼らはみな同じテクニックを用いざるを得なかった。クレオンの演説ぶりは品位を欠き、粗暴であったかも知れないが、「声高に叫んだり、罵倒したりした」最初の人物だったとするアリストテレスの叙述（『アテナイ人の国制』28.3）は、実際のところどうだったのだろうか。メレシアスの子ツキディデス（そして歴史家ツキディデスの親戚）とニキアスは、それぞれペリクレスとクレオンに反対して民会で演説したのだが、そのとき彼らは果たして、ささやくような声で語ったのだろうか。また、ツキディデスは上流階級の支援者たちを民会に連れて来て座らせ、“サクラ”にしたのだろうか。¹⁸⁾

こんなことを追究しても、大して意味があるとは思われない。アリストテレスが指摘したように（『アテナイ人の国制』28.1）、ペリクレスの死はアテナイ社会のリーダーシップの歴史において一つの分岐点となった。それ以前は指導者は古い家柄の土地所有貴族から出ていて、その中には民主制を完成させた諸改革を断行した人々も含まれていた。ペリクレスの死後、新しい部類の指導者が出現した。鞆屋のクレオンとか、豎琴作りのクレオフォンといった偏見を抱かせるような言及がよくなされるが、彼らは実際は貧しくはなく、職人や労働者上りの政治家でもなく、資産家であり、家柄においてももの見方においてもそれまでの指導者たちとは異なっていた。そして彼らは無遠慮にもそれま

18) Plutarch, *Pericles* 11. 2. [『プルターク英雄伝』(三), 岩波文庫 1953年, 20—21ページ]。前410年における復活された民主制のもとで評議会の構成員が席次を抽選によって決めるように求められたのは、こうした戦術に対抗するためであった。 Philochorus 328 F 140.

19) W. R. Connor の *The New Politicians of Fifth-Century Athens* (Princeton 1971) と C. Ampolo による書評——*Archeologia Classica*, 27 (1975) 95—100——を見よ。

でのリーダーシップの独占を破って、反感と敵意を引き起こした。¹⁹⁾ そのような態度を論議する場合、最低限の説明としてクセノフォンの記述を参考にすることができよう（従ってそれは必ずしも間違っただけのものとは限らない）。新しい指導者の中で最も重要な一人はアニュトスと呼ばれる人物であった。アニュトスは、それ以前のクレオンと同じように、奴隷を使う鞆業から富をきざいた。彼は長期にわたる、際立った経歴の持ち主だったが、同時に、ソクラテスを訴追した中心人物であった。クセノフォンはどうか説明しているだろうか。彼は単に次のように述べているに過ぎない。すなわち、アニュトスが息子を紳士として教育せず、鞆業をつがせようとしたために、ソクラテスがアニュトスを公の場で非難し、その個人的な侮辱に対する復讐として、アニュトスはソクラテスを裁判にかけ、死刑に追い込んだ、と。（クセノフォン『ソクラテスの弁明』30—32）。

このいずれも、見かけの偏見と濫用の背後に非常に基本的な問題があったことを否定するものではない。紀元前5世紀を通して、民主制（あるいは寡頭制）と帝国という一対の問題が存在し、それはペロポネソス戦争で頂点に達した。この戦争の敗北は、帝国を終焉させ、そして間もなく、アテナイはいかなる統治形態をとるべきなのかという論議も終始符を打たれた。寡頭制は現実政治の中で、もはや重大な問題ではなくなった。ただ哲学者たちだけがそれにこだわり、幻想を作り上げた。彼らはいまや政治的には非現実なものとなった、紀元前5世紀の問題を紀元前4世紀になっても議論し続けた。紀元前4世紀の中葉になると、現実の政策問題は以前ほど劇的ではなかったであろう。もっとも参加者たちにとっては、それらは重要性が必ずしも薄れたわけではない。たとえば、海軍、財政、ペルシアや他のギリシア国家との外交関係、そして食糧供給という恒常的な問題などである。そして最後に大きな論争が、台頭してきたマケドニア勢力をめぐって巻き起こった。その議論はほぼ30年にわたってなされ、それに終始符が打たれたのはアレキサンドロス大王の死の翌年、つまりマケドニア軍によってアテナイの民主制そのものが廃止されたときである。

これらの問題はすべて、人々によって意見が異なっても不思議ではなく、し

かも感情をかきたてるような問題だった。これらの争点について、たとえばプラトンの主張はまじめに考慮されるべきであるが、それもプラトンが本気でそれらの争点を取り上げている場合に限ってのみ、そうすべきである。論争の中で、誰かをデマゴギーだと非難することは、いわゆるデマゴグたちが非難される根拠となった、あの受け入れがたい議論のやり口と全く同じやり口に頼ることになってしまう。例えばツキディデスが、シケリア遠征をすべしというアルキビアデスの主張を、彼の個人的な放縦さや他の私的な恥ずべき動機に帰したことが正しいと仮定してみよう。しかし、それは提案自体の利点と、いったいどのような関係があるというのだろうか。一つの戦争措置としてのシケリア遠征は、アルキビアデスが天使のような青年だったとしたら、より良い考えとなったのだろうか。いや、そんなことはありえないし、それと同様な他のすべての主張に関しても同じことがいえよう。雄弁術に対する反対は、即座にしりぞけられるべきである。というも、アテナイを指導したいと願うことは、アテナイを説得しようとする重荷を担うことを意味しており、そのような努力の不可欠な部分は公の前での雄弁術にあったのであるから。

もちろん、区別をつけることはできる。例えば、雄弁家の一団が、守るつもりもないし、守ることもできないような約束を掲げて運動する場合には、「デマゴグ」というレッテルを最も軽蔑的な意味で貼ってもよいと思う。しかし、重要なことだが、このような非難がいわゆるデマゴグたちに向けられたことは稀であって、我々が知っている唯一の明白な例は、他陣営からのものである。アテナイ人たちが前411年の寡頭制を受け入れたのは、それが当時ペルシアの支援を受けることのできる唯一の道であり、負け戦さに勝つための唯一の方法なのだという訴えを信じてのことであった。ツキディデスが明らかにしているように（『戦史』8.68—91）、最も好意的に見ても、ペイサンドロスと彼の仲間は当初はそのつもりだったかも知れないが、彼らは戦争に勝つためという口実を直ちに放棄して、勝ち取ったばかりの寡頭制をできる限り狭い基盤の上に保持しようと懸命になった。「デマゴギー」という言葉を軽蔑的に使うとするならば、これこそ、まさに「デマゴギー」である。つまり、文字通り、「人々を誤った方向に導く」ことである。

しかし、それならば利害の問題、すなわち国家全体の利益と国家内の一部ないし一党派の利益との間の衝突の問題はどうであろうか。それは妥当な区別の仕方ではないのだろうか。残念ながら、クレステネスが民主制を一番最初に確立した前508年から、ペリクレス時代後期までの間の、長期にわたる議論がどのようになされたかについて、何ら直接的な証拠は遺されていない（間接的な証拠も、価値あるものは一切遺されていない）。これらの期間は、階級的な利害が人々の口に公然とのぼったと考えられる。しかし実際の言葉が遺っているのは前5世紀の終わりからでしかなく、それらによると、プラトン一派を盲信していなかった人々ならば誰でもわかったであろうこと、つまり、民会での訴えは普通は国家的なものであって、党派的なものではなかった、ということが明らかである。富者を向こうに回して貧者にあからさまにおもねたり、都市住民に対して農民たちにおもねたり、あるいはその逆を行うようなことは、ほとんどなかった。実際、そのようにあからさまにおもねる必要があったのだろうか。

同時に、政治家は、現代の選挙区においてであれ、古代アテナイの民会においてであれ、階級的、階層的利益やそれらの間の対立を無視することはできない。アテナイの例を見ると、多くの問題——例えば、帝国、ペロポネソス戦争、あるいはマケドニアのフィリッポスとの関係——について、政策をめぐる意見の違いがあっても、それは必ずしも階級的、階層的な区分に沿ったものではなかった。しかし他の問題、例えばアルコン職や他の役職に登録資産の少ない人々にも解放する問題や陪審員への報酬、あるいは前4世紀には船隊に対する資金拠出や貧民観劇基金の問題などは、その性格からいって階級的な問題であった。このことを政策の推進者の側も反対者の側もわきまえていたし、それに応じてどのように、いつ、自分の訴えをすべきか（あるいは、いつ、すべきでないか）もわきまえていた。もちろん、彼らはそれぞれ、自分たちの見解だけがアテナイを全体として前進させるものだ主張し、信じてもいたが。エフィアルテスとペリクレスに反対して、「エウノミア」(eunomia)、すなわち法によって支配される良き秩序状態がより道徳性が高いと主張することは、現状維持の主張を粉飾するものにすぎない²⁰。

アテナイの国制に関する小著の中で、アリストテレスは次のように書いている（『アテナイ人の国制』27.3—4）。「ペリクレスははじめて陪審者に給料を出すこととしたが、これはキモンの富に対抗して民心を得んがためであった。何となればキモンは王者のごとき富を擁し、まず公共の奉仕を華々しく勤め、次いで自分の区の人々を大勢養っていた。……誰でも欲する者は毎日彼の許に赴いて相当な給養を受けることができたし、更にキモンの所有地はみな困いがなく、誰でも希望者は果実を享受することができるようになっていた。この気前の好きに対してペリクレスは財力の点で劣っていたので……ダモニデスの忠言に従った。……大衆に大衆自身のものを与え……陪審者への手当を定めたのであった。」

前に触れたように、アリストテレス自身はペリクレスの体制を讃えており、この点に関しては評価を回避している。だが彼以前および彼以後にこの問題を取り上げた人々は、それは大衆に迎合するデマゴギーの格好の例だと考えた。それに対しては当然、次のように反論することもできる。キモンが行ったことも同じように迎合ではないのか否か、あるいは、陪審員への手当の支払いに反対することも、やはり迎合ではないのかどうか（但しこの場合は財産のある人々に対しての）、と。だが、このような観点からは、有益な分析は不可能である。なぜなら、それでは民主制に対する評価の違いの本当の理由が隠されてしまうだけだからである。もし統治形態として完全な民主制に反対であるとするならば、手当を支払うことによって陪審員への大衆の参加を促すことは誤りである。何故かと言えば、それは大衆の参加を促すという目的が誤っているからであって、ペリクレスがそうした措置を提案し、実行して、指導者としての地位を獲得したからではない。そして、民主制に賛成する場合には、その逆のことが言えよう。

これらすべてから浮かび上がってくるのは、非常に単純な命題、すなわちデマゴグたち——私はこの言葉を価値中立的な意味で用いるが——はアテナイ

20) 『エウノミア』は……過去の理想であり、ソロンの理想でもあったが……いまやそれは不平等に基づいた、最善の国制を意味することとなった。それはいまや寡頭制の理想であった。」 Ehrenberg, *Aspects*, p. 92.

の政治体制の中で構造的な要素であったということである。このことで私が言いたいのは、まず、この体制が彼らなしには全く機能し得なかったということである。第二に、この言葉は階級や観点を問わず、すべての指導者に等しくあてはまるということである。第三に、指導者たちは比較的広い範囲内で、その作法や方法によってではなく、行為全体によって、個々に判断されることになるということである。(つけ加える必要もほとんどないだろうが、彼らが判断されたのは、実際、まさにそのような形においてであった。書物の中ではそう書かれていないかも知れないが。)ある点まではアテナイのデマゴグと現代の政治家とを同じようなものと見なすことは簡単にできるが、区別をつけなければならない点が生じる。それは統治機構の仕事が現代でははるかに複雑になっているからだけではなく、もっと基本的には直接民主制と代表民主制との相異のためである。私はすでに大衆集会(と、その不確実な構成)、官僚機構と政党制度の欠如、およびその結果生じる不断の緊張状態(その中でアテナイのデマゴグたちは生き、活動した)について論じた。しかし若干の検証を必要とする一つの問題が残っている。というのも、これらの条件はアテナイの政治と、一般的にはギリシアの政治の、一見するところ否定的な特徴を説明する上での、重要な部分(全体ではないまでも)になっているからである。デイビッド・ヒュームはそのことを以下のように言っている。「自由な政府から党争を除くことは、全然実行不可能ではないにしても、非常に、困難です。しかし、党派間のそのような宿怨的な激しい敵愾心と、そのような血なまぐさい原則とは、近代においては、宗派間にしか、見出されません。古代史においてわたくしたちがつねに事実としてのべ得ることは、貴族階級であろうと平民階級であろうと(以下のべる点ではどちらでも同じですから)、一方の党派が優勢になった場合、……その場で惨殺し……追放した……訴訟手続の形式も、法律も、裁判も、情状酌量も、全然、ありません……以上のべた文明諸国民は、

21) *Essays* (World's Classics ed., London 1903, pp. 405—6) の中の “Of the Populousness of Ancient Nations”. Jacob Burckhardt, *Griechische Kulturgeschichte* (reprint Darmstadt 1956) II 80—81 [ブルックハルト、藤田健治訳『世界史的諸考察』岩波文庫、1972年] 参照。

自由を非常に愛好しましたが、それを、あまりよくは理解していなかったように思われます²¹⁾。」

アテナイに関して注目すべきことは、アテナイがいかにかにヒュームの述べているこの正しい指摘に対して、完璧に近い例外になっているかということ、つまり「スタシス(党派)」(stasis)の究極の意味から、いかに自由になっているかということである。民主制は、短い内乱の後、前508年に確立された。それ以後、ほぼ2世紀の間で、武装テロや訴訟手続きないし法に基づかない殺戮が行われたのは、前411年と404年のただ二度だけであり、その二度とも、国家の支配権を短期間、掌握した寡頭派によってである。とりわけ二度目の際は、民主派は権力を奪回すると、寡頭派の取り扱いについて寛大であったし、法をよく守った。そのためにプラトンでさえ、そのことを称賛しているほどである。プラトンは前403年の民主制の回復について、次のように述べている。「政変また政変とたび重なるうちには、反目しあっている者たちの間で、一部の者が一部の者に対し、しだいに輪をかけるようにより大きい報復を加えていくようになっていたことも、何ら驚くべきことではなかったのです。けれどもともかく、そのときに〔亡命先から〕帰国した者たちのやり方は、穏健なものでした²²⁾。」このことはこの二世紀には、個々の不正義や残虐行為が全く存在しなかったということを示唆するものではない。ヒュームは——特にアテナイについてではなく、ギリシア一般について語っているのだが——各党派は「以下のべる点ではどちらでも同じ」とであると指摘している。ツキディデスやクセノフォン、プラトンといった人々の歪んだ鏡に映ると、アテナイはぼやけて見えるようである。つまり彼らは民主制下の極端な不寛容の例外的な事例——例えば、アルギヌーサイの海戦で勝利した将軍たちの裁判と処刑やソクラテスの裁判と処刑——を誇大視し、一方で反対側の行動、例えば、前462年ないし461年のエフィアルテスおよび前411年のアンドロクレスの政治的暗殺を過小に見なしたり、全く黙殺したりするが、彼らは共にそれぞれの時代にあって民主派

22) *Epistles* VII 325 B [長坂公一訳「書簡集」『プラトン全集14』岩波書店、1975年]。
Xenophon, *Hellenica* 2.4.43 と Aristotle, *Constitution of Athens* 40 [村川堅太郎訳、前掲書]

の最も有力な指導者であった。

アテナイが他の国家にはよく見られる極端な「スタシス」を免れたとしても、完全に免れることができた訳ではない。アテナイの政治は、イエスカノーかであった。相争う党派の目的は共に、単に相手側を打ち負かすことではなく、つぶすこと、つまりその指導者を打倒することによって壊滅させることであった。そしてしばしば、この闘いは、それぞれの側の内部でも行われ、指導権をめぐる何人かの人々が策略をめくらしていた。その主なテクニックは政治的な裁判であり、主な手段は社交場や密告者であった。私に言わせれば、これらもまたシステムの構造的な一部であって、偶然または不可避に現れてしまったものではない。陶片追放、いわゆる「グラーフエ・パラノモン（違法提案の訴え）」(graphe paranomon)、およびアルコンや將軍、その他の役人の大衆による公的審査はみな、個人への過度の権力集中（そして潜在的な僭主制）を避けるためか、民会自体における腐敗と不正行為、拙速と一時的激情を避けるために、安全装置として意図的に導入された。意図においては、どんなに称賛に値するものであろうと、これらの装置が不可避的に乱用を招いたということを示すのは、抽象的には容易である。問題はここでも、当時は直接民主制であり、政党の機関その他を欠いていたため、それらが利用できる唯一の装置だったことである。指導者と将来指導者になる人々は、それらを利用し、競争相手や反対者を攻撃し、打倒するさらに別の方法を探す以外に、他の道はなかった。

この全面戦争が参加者たちにとって疑いもなく厳しいもので、ときには不公正で誤っていたりしたことさえあったが、だからといってそれが社会全体にとって全くの悪であったということにはならない。甚だしい不公平、重大な利害の対立、意見の当然の相違が深刻に存在した。そうした条件下では、対立は単に不可避であるばかりでなく、民主政治にとっては善いことであった。なぜなら民主制が寡頭制へと墮落するのを防ぐためには、単に同意だけがあればよいというものではなく、同意とともに対立があることが必要だからである。前5世紀の大半を占めていた国制に関する論争では、勝利を取めたのは民主派の人々であった。そして彼らが勝利を取め得たのは、まさに彼らがそのために闘ったからであり、しかも激しく闘ったからであった。彼らの闘いは党派的なもの

であり、例の年老いた寡頭制論者はアテナイの強みはまさにそこにあったと正しく診ている。もちろん、彼の洞察力、あるいは誠実さをもってしても、彼は民主派の指導者たち——ペリクレスのみならず、クレオンやクレオフォン、そしてさらにはトラシブロスとアニュトスも——が彼の時代においてはまだ資産家であり、しばしば貴族階級に属していたという事実に気付くところまでは至っていない。トラシブロスとアニュトスは前403年の三十人僭主の打倒に際して民主派を率い、勝利の後、恩赦を行い、非常な称賛を浴びることになった。この党派的な闘いは必ずしも階級闘争ではなかった。それはまた富者や家柄の良い者の支持をも得ていた。またこの闘いは規則や合法性を欠いたものでもなかった。「エウノミア（良き秩序）」(eunomia)に対する民主派側のスローガンは「イソノミア（独自の国制，民主制）」(isonomia)であった。そしてヴラストスが述べているように、アテナイ人たちは「政治的平等という目標を……法の支配に挑戦するのではなく、それを支持する形で……」追求した。アテナイの貧者は前5、4世紀を通じて一度たりとも、ギリシアの一般的な革命的要求——土地の再分配——を掲げたことはなかった、と彼は指摘している²³⁾。

この2世紀の間、アテナイはあらゆる実際的な見地からみても、ギリシアの大国家であった。この国家は強力な共同体意識を持ち、たとえ帝国の野心があったとしても、強靱さと弾力性が、当時としては（そして他の多くの時代と比べても）類い稀な人類愛と公正さと責任感によって調和していた。ロード・アクトンは、前403年の恩赦の歴史的重要性を認識した数少ない歴史家の一人であった。彼は次のように書いている。「敵対し合う党派は和解し、恩赦が宣告された。それは歴史において初めてのことであり²⁴⁾。」よく知られた諸々の弱点にもかかわらず、群衆心理や奴隷制や多くの指導者たちの個人的な野望、

23) G. Vlastos' "Isonomia," *American Journal of Philology*, 74 (1953) 337—66. Jones, *Democracy*, p. 52 参照。「一般的には……民主制の支持者たちはアリストテレスのように、法律を賢明な立法者によって半永久的なものとしてしかれた規範と考える傾向があった。……つまり原理的に変わることはないが、ただ折にふれて明確にされ、補足されるべきものと見なしていた。」「法の支配」はそれ自体複雑なテーマであるが、本章の主題ではない。また、個々のデマゴグの評価も同様である。

24) *Essays on Freedom and Power* (ed. G. Himmelfarb, London 1956, p. 64) の中の "The History of Freedom in Antiquity".

そして反対派に対する多数派の不寛容にもかかわらず、それは「歴史において初めてのこと」だったのである。またこれだけがアテナイの行った唯一の刷新ではなかった。民主制の機構と機能もすべてアテナイが自身で発明したものである。それは、自由についての自分たちの観念、自分たちの共同体意識、積極的な探求心（または少なくとも探求の結果を進んで受け入れる意志）、そして広範に分かち持たれた政治経験の外には何ものも持たずに、先例のない中で何ごとかを模索してゆく中で生み出されたものだった。

アテナイが達成したものの大半は国家の政治的指導のおかげであるとしなければならぬ。それは論争の余地のないもののように私には思われる。平均的なアテナイ人ならば、そのことを問題にすることなどなかったであろう。あらゆる緊張や不確実性があり、場当たりの判断がなされたり、意見も故なく変わってしまったりすることがあったにもかかわらず、人々は20年以上にわたってペリクレスを支持した。そして1世紀後には、これとは非常に異なった条件の下で、彼とは非常に異なった種類の人間、デモステネスを支持することになったのである。彼らやその他の指導者たち（今では彼らほどよく知られてはいないが）は長い期間にわたって多かれ少なかれ首尾一貫したプログラムを成功裡に果たすことができた。この事実を無視し、また、アテナイをアテナイたらしめた政治生活の仕組みを無視し、その一方でアリストファネスやプラトンの言うことに従って、政治家の人格だけを見たり、彼らの間のペテン師や落第者のみに注目したり、理想的な存在についての何か倫理的な規範のみ問題にしたりするのは全く不当なことである。

結局、アテナイはより優れた外的力によって、自由と独立を失った。アテナイは自分が直面している危機について、後の時代の多くの批評家たちよりももっとはっきりとした理解をもちながら、闘い、そして破れた。その最後の闘いはデモステネスというデマゴグによって指導された。われわれは2世紀にわたって達成されたものをすばらしいものと称賛しながら、同時に政治的枠組みの構築者であり政策の作成者であるデマゴグたち、および彼らの活動の場であった民会をにべもなく一蹴することはできないはずである。